〈青森県史〉の窓 73

青森県の産育習俗
～はじめての外出～

福島春邦
（県民生活文化課
県史編さんグループ　非常勤嘱託員）

乳幼児の死亡率が高かった昔は、「七つ前は神のうち」といわれた。七歳までの子どもは、まだこの世に命が定着してない不安定な状態と考えられていたのだ。伝統的な村社会では、育児のさまざまな場面で、時には呪術的な力を用いて、子の健やかな成長が祈願されてきた。その一例として、初めて外出する赤子の額に十文字やななめ十文字（×印）を墨などで描く習俗がある。県内では、ヤスコやヤチコと呼ばれている。外で悪いものに遭ったり迷ったりしないよう、魔除けや願掛けがなされたのである。

『青森県史民俗編資料南部』には、天間林の例として「赤子が初めて橋を渡って川を越えるときや、実家から戻る途中に川を越えるときに十文字を額に記した」とある。同じく『民俗編資料下北』では「生児は産後二一日経たないと橋を渡れない」とある。橋は、川や渓流で区切られた端と端を繋ぐ通路であり、境界としての性格をもつ。二つの世界を結び、人だけではなく霊や生命が行き来する場として意識されてきた。この世に来たばかりの子の魂があの世に帰らないように、境界である橋を渡ってはいけない期間が設けられたり、ヤスコのような魔除けをしたりして、赤子は護られていたのだ。

また、かつて助産院や病院での出産が一般的になるまでは、自宅で出産が行われていたことを考えると、初めての外出が母親にとっても、現在とは違った意味合いを持っていたことが想像できる。当時の女性たちは、産婆やテンガク、トリアゲと呼ばれた地域の経験豊富な年配の女性の手を借りて、自宅の寝部屋などで、藁をつめた布団を敷き、米俵や藁を俵のように丸めたもので囲い、梁から垂らした帯につかまり、母親や産婆に後ろから「たながれ（抱えられ）」たりして出産した。そして、産婦は産後もしばらくその産室で過ごす。七日後には床上げし、巣上がりや枕引きの祝いとして、近しい親類縁者を招いて赤子が披露される。その後も、産後の養生が必要とされ、三十日間ほどは家中で過ごしたという。

出産は新たな命が誕生する神聖な場であると同時に、出血を伴い時には命の危険がある畏れを抱くべきものであった。その非日常から、産婦と赤子は慎重に時間と儀礼を重ねて、産室の外へ、家の外へ、村の外へとその行動の範囲を広げ日常へと戻っていったのである。

このように伝統的村社会での出産と育児では、母親は家族やその周囲に支えられており、また、子の身体だけではなく魂を護り育もうと種々の儀礼や習俗が培われた。個人化が進み核家族で子育てが行われる今こそ、その先人の知恵が伝える心意を問い直すべきではないだろうか。

エンツコに入った赤ん坊
（昭和20年代・堀谷ミツ氏所蔵）